

- 21) a. 私が 彼が 好きなこと (は秘密だ)。
 文法関係 主語 目的語
 格 主格 主格
 b. 我喜欢他 (这件事是个秘密)。
- (22) a. 私に 中国語が できること (は誰も知らない)。
 文法関係 主語 目的語
 格 与格 主格
 b. 我会中文 (这件事, 谁也不知道)。
- (23) a. 私に お金が 要ること (には理由がある)。
 文法関係 主語 目的語
 格 与格 主格
 b. 我需要钱 (是有理由的)。

(20) ~ (23) の各a文において、下線部が目的語であることは、対応する中国語であるb文では、全て目的語であることから証左を得られるだろう。

(20) ~ (23) の各a文からわかることは、主格「が」が、目的語とも結びつき得る、という現象である。この現象からも、「が」がついているからといって主語とは断定できない、ということがわかる。よって、場面設定語は、主格「が」がついているから主語だ、と断定はできないのである。さて、井上(1989:163)が指摘するように、「が」の重出を許す主述述語文は、状態性や恒常性を示す述語に限られる。以下の例は、「が」の重出を許す文であるが、下線部は、いずれも状態や恒常性を示す述語である。

- (17) a. 夏がビールがおいしい。
 (19) a. 文明国が男性が平均寿命が短いです。
 (24) 欧米諸国が地方都市が生活環境が整っている。(井上1989:163)
 (25) 朝が電車が混みます。
 (26) アジア諸国が、特に日本が、老人がよく働く。

「が」名詞句が三つ連なることを許す日本語の構造は、Fukui (1986) が指摘しているように、属格「の」が理論上は無限に連なることを許す日本語の構造と平行する。例えば、

- (27) 慶応大学 (で) の、先週の、山田教授のその講義 (には多くの聴衆が集

まった) (福井 (1989) による例文)

のような、名詞句に属格「の」がついた名詞句がいくつも連なる構造を日本語は許すのである。一方、英語では、「が」名詞句や「の」名詞句の重出に対応するような統語構造を許さない。以下の非文法的な英語訳は、福井 (1989) によるものである。

(28) a. *civilized countries, male, the average lifespan is short.

文明国が、男性が、平均寿命が短い。(Kuno (1973) による例文)

b. * Keio University's last week's Professor Yamada's that lecture.

慶応大学の、先週の、山田教授のその講義

中国語の対応表現を考えると、「的」の重出は、修辞学的要因か、或いは統語構造的な要因か、日本語のように自由ではない。

(29) ??清华大学的上周的汤教授的那堂演讲。

ただ少なくとも、日本語においては、「が」の重出が、「の」の重出と統語的に平行性があるということ、そしてこうした統語的平行性が、前述の「が/の」の交替を許す要因である、ということが指摘されている。ここで、関心をひくのは、日本語の主述述語文は、「は/が」を「の」で置きかえることが可能な場合が多いという点である。

(30) a. 象 {は/が} 鼻が長い。

b. 象の鼻が長い。

(31) a. 夏 {は/が} ビールがおいしい。

b. 夏のビールがおいしい。

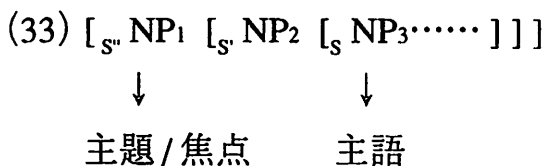
(32) a. 文明国 {は/が} 男性が平均寿命が短い。

b. 文明国の男性が平均寿命が短い。

(30) ~ (32) の a 文は、各々 b 文のように、文頭の「は/が」を「の」で置きかえることができる。もちろん、この場合、「は」や「が」が担っていた文全体をスコープにとりこむ、主題や焦点といった談話機能は「の」はもたない。

以上考察したことをまとめると、次のようになる。場面設定語がある場合、日本語でも、「は」や「が」が重出する所謂「多主語構文」が多くみられる。「が」名詞句が三つ連なるような文さえ可能である。この場合、「が」名詞句

全てが主語なのか、という問題は、日本語の「が」名詞句が目的語を表したり、また「の」との交替が可能だったり、という「が」の用法の多様性からみても、主格「が」=主語とはいえない。あくまでも、述語が語彙的に選択する外項をもって主語と規定するのが一般言語学的見地からみても簡潔な方法である。しかし、少なくとも、日中両語いずれも、(33)に示すように、文頭の名詞句が主題又は焦点になりうるような「多主語構文」を許す統語構造を持っているといえる。ここまでの考察では、所謂「多主語」は、場面設定語2つ、主語1つで、計3つ生起可能である。



2.3 C類：移動型

この型の主述述語文は、本稿の立場からすれば、目的語が前置された構造である。

まず例を挙げよう。下線部が、前置された目的語である。

(34) a. 那个人我认识。

{その/あの} 人は、私は知っています。

b. 这本书我读过了。

この本は、私は読んだことがあります。

c. 他一句话也不说。

彼は、一言も {話さない/話さなかった}。

この型の構文は、中国語学界では、1950年代に、所謂「主賓語論争」の的になった構文である。即ち、文頭の名詞句は前置されても目的語のままであるという立場と、前置されると目的語ではなくなり主語の資格を得るという立場の間での論争があったのである。

本稿の立場では、(34)の各文は、いずれも、述語の目的語が、前置されて、主題や焦点という談話機能を担っている。表1に示したとおり、目的語は、文法機能レベルの概念であり、主題や焦点は、談話機能レベルの概念で、互いに自律的なレベルである。

(34a,b) は、目的語が主題化されている例であり、(34c) は、目的語が焦点として、前置されている例である。(34c) の「一句话」を焦点とみなすことの妥当性は、日本語の対応する名詞句に、焦点標識「も」がつくことから支持されるだろう。

さらに、第1節で述べた、日中語における、主語を認定する際の、二つの統語的テストのうち、再帰名詞の先行詞テストを適用してみよう。

(35) 那个人, 我曾经在自己的家里见过。

あの人、私は自分の家で会ったことがあります。

(35) において、「自己」「自分」の先行詞は、文頭にある「那个人」「あの人」ではなく、「我」「私」である。このことから、主題化が起こって基本語順が変わっても、主語・目的語といった文法関係は、不変であることがわかる。この現象からも、(34a,b) (35) のような文の文頭の名詞句は、主題化された目的語とみなすのが、妥当であるとわかる。

このような立場から、本稿では、C型を移動型と呼び、主題構造を考察の対象にして、日本語との対照を試みたい。この型の主題構文は、A型の「象は鼻が長い」型やB型の場面設定語型とは異なり、英語にも対応表現がある。

(36) a. These books, he has read already.

b. 这些书他已经看过了。

c. これらの本は、彼はもう読んでいます。

文頭の名詞句 ‘these books/这些书/これらの本’ は、いずれも動詞 ‘read/看/読む’ の目的語であるが、これが主題化により文頭に移動して主題という談話機能を果たしている。英語では、文頭に移動した ‘these books’ を主語とみなすわけにはいかない。なぜなら、助動詞 ‘has’ は、人称と数において、‘he’ に一致しており、一致をおこす名詞句以外を主語とは呼べないからである。

本節では、以下、目的語の主題化のみならず、目的語以外の成分の主題化をも含めて考察したい。この移動型主題の場合、日本語においては、「は」がつくことによって、格助詞「が」「を」は義務的に削除されるが、実は中国語でも類似の現象がある。中国語には形態的主格・対格が普通存在しないが、動作主を表し、随意的に用いられる「由」や、目的語が動詞の前に存在する場

合の目的語標識「把」が存在する。こうした前置詞は、その前置詞句が主題化されると、義務的に削除されなければならない。例をあげよう。

- (37) a. 运输问题由他们解决。
 運輸問題は、彼等が解決する。
 b. * 由他们运输问题解决。
 彼らが運輸問題は解決する。
 c. 他们解决运输问题。
 彼らは運輸問題を解決する。

- (38) a. 我把书看完了。
 私は本を読み終えた。
 b. * 把书我看完了。
 c. 书我看完了。
 本は、私は読み終えた。

「由」「把」が、文頭に現れることができないのは、この二つの介詞が、格標識であると同時に、焦点標識でもあることに起因する。「由」「把」がついた名詞句は、焦点の解釈を受け、中国語では、文頭に位置することができないのである。この制約は、「旧情報から新情報へ」という語順の談話制約の忠実な反映である。

さて、次に考えたいのは、どのような文法成分が、文頭に移動できるかということである。この問題に関しては、藤堂（1968）がすでに、日本語の格助詞の観点をも取り入れて、中国語の目的語を分析し、先見を示している。同氏は、次のように述べている。表現は、引用者によって、若干変えてある。

もともと動賓構造の内容というのは、きわめて複雑で、動詞の性質によって客語の対応の仕方が少しずつ異なっている。‘格’というのは客語自体がどういう姿勢で動詞に対応しているかという姿勢の型であるから、その姿勢いかんによっては、とうてい引きだせぬこともあり、また他にコトバを加えてその格を明示しないと、引き出せないこともある。

中国語の目的語は、日本語からみると、「が」「を」「に」「で」「まで」「へ」「と」

等のさまざまな格助詞がつく日本語の名詞句に相当する。藤堂氏はここに注目して、「中国語の目的語には、形態的格標識は存在しないけれども、抽象的な、意味格が存在する」という考え方をなさっているのだと思う。これは、後年提案されるところの「意味役割」(semantic roles) や生成文法での「主題役割」(thematic roles) に近い考えである。意味役割・主題役割とは、「動作主」(agent)、「感情・感覚の経験者」(experiencer)、「被動者・被動物」(patient)、「対象」(theme)、「受取人」(receiver)、「受益者」(benefactive)、「場所」(locative)、「起点」(source)、「着点」(goal)、「道具・手段」(instrument)、「随伴者」(comitative)等の名詞句が述語に対してとる役割のことである。こうした意味役割を考えることが、中国語の目的語のうち、あるものは前置されやすく、あるものは前置されにくい、という異なった振る舞いをする現象を説明するのに役立つ、と藤堂氏は考えていらっしやる。藤堂(1968)によれば、目的語の文頭への提前には、次のような「格」による制限がある。

(I) 「を」という目的格にあたる目的語は、文頭にひきだせる。

我不吃饭。→ 饭, 我不吃。

(II) 動作がその場所自体を目指した目的語は、その場所は目的格に準じるから、文頭にひきだせる。

我去过上海。→ 上海, 我去过。

(III) 動作がその場所や時間を目指したものではない目的語は、目的格ではなく、位置格であるから、提前することはできない。

我拿到楼上。→ *楼上, 我拿到。

我等到六点钟了。→ *六点钟, 我等到。

我送到车站。→ *车站, 我送到。

(IV) 「に」という与格にあたる関係を示す目的語は、「对～」「跟～」「给～」などの介詞をつけないと、文頭に引き出せない。但し介詞構造は、一般には文頭に引き出すには抵抗がある。しかし、「对」だけはこの制約をのがれうるようである。

我很感谢他。→ 对他, 我很感谢。

(V) 変化の結果を表す「に」にあたる目的語は、提前することはできない。

他变成穷医生了。→*穷医生，他变成。

(VI) 「～と呼ぶ」「～と言う」などの「と」にあたる呼称を表わす目的語は、
 提前できない。

他姓李。→*李，他姓。

藤堂氏のおっしゃる「格」は、実は、日本語では「が」格、「を」格、「に」格、「で」格等として現れる「形態格」(morphological case)と、動作主、対象、受取人、場所、着点、道具・手段、起点といった意味役割が混在している。しかし、現在では、名詞句分析の際の自律的レベルとして、意味役割、形態格、文法関係(主語・目的語など)、談話機能(主題、焦点、対比など)の四つのレベルがあり、それらは互いに独立したレベルと考えた方が、より厳密に言語現象を説明できると考えられている。もちろん、動作主が、主格になりやすく、主語になりやすく、主題になりやすい、という傾向は、多くの言語にみられるのだが、文頭への提前がされやすいか否かは、厳密に言えば、意味役割と深く関わっている。以下、中国語も日本語も同様の現象を表すことを示しつつ、文頭への提前が、意味役割に深くかかわっていることを示したい。

① 動作主：意志をもってある行為を行う者

能動文の場合、動作主は、ほとんどの場合、主語として現れるから、中国語の場合、もともと文頭に位置する。日本語の場合、「は」が付加されていることが多いが、主格「が」がついて、焦点を表す場合もある。

(39) a. 我去台北。

b. 私は台北へ行きます。

c. 私が台北へ行きます。

動作主が主語になりやすく、そして主題にもなりやすいということは、言語の普遍性であるといえる。

② 感情・感覚の経験者：ある感情や感覚を感じる者

日中語とも、主語として現れるのがほとんどである。日本語では、「は」をとるのが無標である。「が」をとるのは有標であり、焦点の解釈をもつ。

(40) a. 我喜欢黎明。

b. 私はレオン・ライが好きだ。

c. 私がレオン・ライが好きだ。

動作主・経験者とも、主語になりやすく、また主題になりやすい、そのため文頭に位置するのが普通である、という共通する傾向が、日中両語にみられる。

③ 被動者・被動物：ある動作によって、変化・移動等の何らかの影響を受けるもの

被動者・被動物は、能動文では「を」格をとる目的語、非対格構文・受動文では主語として具現化することが多い。そして、能動文の目的語として具現化した対象を表す名詞句は、日中語とも、文頭におかれやすい。文頭に置かれた場合、日本語では、「は」が付加されると「を」格の脱落は義務的であり、中国語の場合、何の介詞もつかない。

(41) a. 我吃过饭了。

b. 饭，我吃过了。

c. 私はもうご飯を食べました。

d. ご飯は、私はもう食べました。

被動者・被動物が文頭に提前されやすいという現象は、被動者・被動物が主語となる非対格構文・受動文が存在することとも関係する。つまり、被動者・被動物は、主語になりやすいのである。(42a, c) は、被動者・被動物が目的語になっている他動詞文で、(42b, d, e, f) は、被動者・被動物が主語となっている非対格構文である。

(42) a. 她开了门。

b. 门开了。

c. 彼女はドアを開けた。

d. ドアが開いた。

e. ?ドアは開いた。

f. ドアは開いている。

但し、日本語の非対格構文は、(42e) のように、「は」をつけると、対比の意味が強くなる。(42f) のように、「ている」をつけて、非対格動詞が状態性を表したときに、主題の意味が強くなる。ともあれ、被動者・被動物が主語になりやすい、ということと、被動者・被動物が文頭に提前されやすい、とい

うことは、深い関係がある。

④ 対象:「～に対して」で表されるような感情の対象や、状態述語の対象。

被動者・被動物と異なり、ここでいう「対象」とは、変化・移動などの影響をうけない、他動性の低い、感覚述語や状態述語の対象をさす。日本語では、多くの場合、「を」格ではなく、「に」格をとる。「は」が付加されても、「に」格の省略は許されない。藤堂(1968)では、「関係格」と呼ばれているものがこれにあたる。中国語では、述語に後続する場合は目的語として、介詞をつける必要がないが、提前されると、必ず「对」「跟」等の介詞が必要となる。これが、同じ目的語でも、被動者・被動物の場合と違う振る舞いである。

(43) a. 我很对不起他。

b.* 他, 我很对不起。

c.? 对他, 我很对不起。

d. 私は、彼に申し訳ない。

e.* 彼は、私は申し訳ない。

f.? 彼には、私は申し訳ない。

(44) a. 他很关心政治。

b.* 政治, 他很关心。

c. 对政治, 他很关心。

d. 彼は、政治に関心がある。

e.?? 政治は、彼は関心がある。

f.? 政治には、彼は関心がある。

(45) a. 我很感谢母亲。

b.* 母亲, 我很感谢。

c. 对母亲, 我很感谢。

d. 私は、母に感謝している。

e.* 母は、私は感謝している。

f. 母には、私は感謝している。

(46) a. 他不太像母亲。

b.* 母亲, 他不太像。

c. 跟他母亲, 他不太像。

- d. 彼は母親に似ていない。
- e.* 母親は、彼は似ていない。
- f. 母親には、彼は似ていない。

以上の(43)から(46)の各例文中、各a文及びd文は、それぞれ中国語及び日本語の基本語順をしめす例文である。各b文及びe文が示すように、中国語においても、日本語においても、対象という意味役割を担う名詞句は、「対」「跟」等の介詞や、与格「に」をつけずに文頭に移動することはできない。また、各c文及びf文は、介詞や与格をつけて文頭に移動しても、不自然な場合があったり、または自然であっても、主題ではなく、対比の意味が強くなる傾向があることを示している。こうしたことから、対象という意味役割を担う名詞句は、被動者・被動物という意味役割を担う名詞句と比べて、主題にはなりにくい、ということがいえる。

⑤ 受取人：ある物（被動物）が移動した結果、それを受け取る人。

受取人が目的語になる場合、日本語では与格「に」がつく。中国語では、動詞にすぐ後続する場合は、何の介詞もつかない。受取人目的語の文頭への提前の例を考えよう。

- (47) a. 我给了他五百块钱。
 b.* 他，我给了五百块钱。
 c. ??对他，我给了五百块钱。
 d. 私は彼に500円あげた。
 e.* 彼は、私は500円あげた。
 f. 彼には、私は500円あげた。

- (48) a. 我送他一本书。
 b.* 他，我送一本书。
 c. ??给他，我送一本书。
 d. 私は彼に本を一冊あげた。
 e.* 彼は、私は本を一冊あげた。
 f. 彼には、私は本を一冊あげた。

(47b, e) 及び(48b, e) からわかることは、日中両語において、受取人目的語は、介詞や格助詞なしで文頭に移動できない、ということである。中国語に

おいては、(47c) 及び (48c) が示すように、「対」「給」といった介詞をつけても、不自然である。中国語の場合、受取人目的語を主題化する場合、(49) のような、主題と同一指示の代名詞を目的語の位置に残すような文型がとられる。

(49) 张三, 我送他一本书。

張三は、私は彼に本を一冊あげた。

受取人目的語、即ち間接目的語の振る舞いは、直接目的語の振る舞いと対照的である。直接目的語（ある動作を受けて移動するという意味で、本稿の枠組みでは、被動物という意味役割をもつ）の場合、それが「定」(definite) の表現であれば、(50) (51) が示すように、問題なく文頭へ提前できる。

(50) 那五百块钱, 我给他了。

(51) 那本书, 我送他了。

なぜ、中国語では、直接目的語は、介詞なしでも文頭に提前できるのに、受取人である間接目的語はできないのであろうか。それは、受取人は、移動物の落ち着き先、帰着点、即ち動作の結果を表わすからであらう。「行為—結果」の構図では、結果は文末に位置するのが基本である。

⑥ 受益者：ある行為によって利益をうける人。

受益者は、日本語の「もらう」構文「私は、太郎に掃除をしてもらった」のように、主語になることもあるが、随意項としては、「給」「为」「替」等の介詞、「に」「ために」等の助詞が現れる。例をみよう。

(52) a. 小明 {给/替/为} 小华打扫了房间。

b. {*给/替/为} 小华, 小明打扫了房间。

c. 太郎は、花子に掃除をしてあげた。

d. ?花子には、太郎は掃除をしてあげた。

e. 花子に、太郎は掃除をしてあげた。

(53) a. 小明 {给/替/为} 小华的父亲买了那本书给小华。

b. {*给/替/为} 小华的父亲, 小明买了那本书给小华。

c. 太郎は花子の父親の為に花子にその本を買ってあげた。

d. ??花子の父親の為には、太郎は花子にその本を買ってあげた。

e. 花子の父親の為に、太郎は花子にその本を買ってあげた。

まず、日中両語とも、介詞・助詞を省略して文頭に移動することはできない。第二に、中国語では、受益者を文頭に移動することは可能だが、その際、「給」は文頭におけない。この制約は、「給」が補語について文末に位置する機能もあることと関係するのだろう。日本語では、(52d) (53d) のように、「は」をつけて受益者を主題化すると不自然である。(52e) (53e) のように、「は」をつけずに、ただ文頭へ移動するだけなら容認可能である。これは、日本語が、「かきませ」(scrambling) による名詞句及び副詞句の自由語順を、談話制約に反しない限りにおいて、許すからである。しかし、「は」による主題化ができないという現象は、中国語において、(52b) (53b) のように受益者が文頭に移動したとしても、かならずしも主題とは限らない、ということを示唆している。

⑦ 場所：ある出来事がおこる場所や、ある出来事の結果、主体又は客体が存在する場所。

まず、場所という意味役割を担う名詞句は、文頭に位置する場合、介詞や助詞が省略される場合（主述述語文の場合）と、介詞「在」、格助詞「に」「で」がつく場合の、二つの場合がある。

- (54) a. 日本温泉很多。
b. 日本は、温泉が多い。

- (55) a. 在日本温泉很多。
b. 日本には、温泉が多い。

(54) は、日中両語とも、場所を示す文頭の名詞句に介詞及び格助詞がついていない、所謂主述述語文である。(55) は、「在」「に」がついている場合である。両者の相違は、前者が「日本」についての特徴として、「温泉が多い」と述べているのに対して、後者が、「日本に」という場において、「温泉が多い」という状況を述べているという相違にある。(54) における介詞・格助詞なしの「日本」の方が、主題性が高いといえるだろう。

次に、場所を表す名詞句には、日本語の場合、「に」がつく場合と「で」がつく場合がある。前者は、述語の義務項である場合で、後者は述語にとってあってもなくもよい随意項、即ち副詞的に機能する場合である。この二つの場合にわけて、文頭への移動が可能かどうかをみてみよう。まず、ある動作

の結果、主体又は客体が存在する場所を示し、「に」がつく述語の義務項である場合を考えよう。

- (56) a. 她一个人留在伦敦。
 b.* 在伦敦，她一个人留。
 c. 彼女は一人でロンドンに残った。
 d. ?ロンドンには、彼女 {が/は} 一人で残った。

(56b) が示すように、中国語では、主体が存在する場所「在伦敦」は文頭に移動することはできない。これは、結果状態を示す場所詞は、文末に位置するという中国語の語順と関係するからであろう。一方、日本語の場合、(56d) のように主体が存在する場所「ロンドンには」を主題化すると、対比の意味が強くなる。

次に、ある出来事がおこっている場所を示す、「で」がつく副詞的な場合について考えよう。

- (57) a. 他在图书馆读书。
 b.* 在图书馆，他读书。
 c. 彼は図書館で勉強している。
 d. 図書館では、彼 {??が/*は} 勉強している。

この場合も、日中両語ともに、文頭への移動は、不可能か、非常に不自然である。

以上の考察をまとめると、次のようになる。主題になりやすいという観点からみた、場所を示す名詞句には、いくつかの下位分類がある。まず、主題に最もなりやすい、「日本は温泉が多い」型で、ある場所の特徴を述べているような文が続く場合がある。次に、こうした型の文頭の場所詞に、「在」や「に」がついた場合でも、主題となる。しかし、場所を表す名詞と、後続する叙述に、陳述関係、即ちその場所について特徴づけを行うような関係にない場合は、主題になりにくい。特に、中国語の場合、ある動作の結果、主体が存在する場所は、文頭に移動できない。

⑧ 起点：主体や客体の移動前の場所又はあるできごとの出発・開始時点。

起点を示す名詞句は、文頭に移動する場合でも、必ず「从」や「から」が必要である。まず、移動前の場所を示す場合を考えよう。

- (58) a. 他们从城市搬倒乡村。
 b. 从城市，他们搬倒乡村。
 c. 彼らは都会から田舎に引っ越した。
 d.* 都会からは、彼ら {が/は} 田舎に引っ越した。
 e. 都会から、彼らは田舎に引っ越した。

日本語では、(58d) が示すように、「都市から」は主題化できない。(58e) のように、単にかきませによって、「は」をつけずに文頭にもっていくことは可能である。「台湾からは、政治大学の学長が来る」というような、対比の意味をもつ文が存在することもある。しかし、起点を示す名詞句は、主題化できないことが多い。

次に、開始時点を表す場合だが、この場合、日中両語とも、文頭への移動は不可能である。

- (59) a. 会议从九点持续到十一点
 b.* 从九点，会议持续到十一点
 c. 会議は九時から十一時まで続いた。
 d. 九時からは、会議 {??が/*は} 十一時まで続いた。

つまり、起点を表す名詞句は、文頭に移動しにくく、また主題化されにくい、ということがいえよう。

⑨ 着点：人やものの移動後の場所、動作や変化の結果状態、出来事の終結時点等。

着点を表す場所や時点は、日中両語とも、次の例文が示すように、文頭に移動することができない。

- (60) a. 他们从伦敦旅行到巴黎。
 b.* 到巴黎，他们从伦敦旅行。
 c. 彼らはロンドンからパリに旅行した。
 d.??パリには、彼らはロンドンから旅行した。
 (61) a. 那块田地变成停车场。
 b.* 停车场，那块田地变成。
 c. 畑は駐車場になった。
 d.* 駐車場には、畑はなった。

- (62) a. 東京外国語大学从十一月四日到六日举办独立一百周年庆祝活动。
 b.* 到六日, 東京外国語大学从十一月四日举办独立一百周年庆祝活动。
 c. 東京外国語大学は、11月4日から6日まで独立百周年祝賀事業を行う。
 d. 6日までは、東京外国語大学 {が/? ?は} 11月4日から独立百周年祝賀事業を行う。

これは、着点は文末におかれるという語順の普遍性の反映と思われる。先に⑤でみた受取人も、ものが移動した後の落ち着き先であるから、着点の一種とみなすことができるが、中国語ではやはり文頭に移動できなかった。

⑩ 手段・道具

手段・道具を表す名詞句は、「用」や「で」で表されるが、この名詞句の文頭への移動、主題化の例をみよう。

- (63) a. 小明能用普通的材料做很好吃的菜。
 b. 用普通的材料, 小明能做很好吃的菜。
 c. 太郎はありきたりの材料でおいしい料理を作る。
 d.* ありきたりの材料では、太郎 {が/は} おいしい料理を作った。
 e. ありきたりの材料で、太郎はおいしい料理を作った。
- (64) a. 小明用大字笔写大字。
 b. 用大字笔, 小明写大字。
 c. 太郎は太字ペンで大きな字を書いた。
 d. 太字ペンでは、太郎 {??が/*は} 大きな字を書いた。
 e. 太字ペンで、太郎は大きな字を書いた。
- (65) a. 小明坐火车到了巴黎。
 b. 坐火车, 小明到了巴黎。
 c. 太郎は列車でパリに着いた。
 d. 列車では、太郎 {??が/*は} パリに着いた。
 e. 列車で、太郎はパリに着いた。

日本語では、道具・手段を表す名詞句を主題化（「は」をつけて文頭に移動する）ことはできない。しかし、各e文が示すように、「は」をつけずに、ただかきまぜによって文頭に移動させることはできる。このことから、中国語の各b文も、主題ではなく、対比の意味が強いと考えられる。

さて、(64) と類似する文で、次のようなものがある。例を李 (1995:362) から引用しよう。

(66) a. 用大字笔写大字，用小字笔写小字。

b. 大字笔写大字，小字笔写小字。

問題となるのは、(66b) では、「大字笔」「小字笔」が介詞が省略されたかたちで主題化されていることである。しかし、これは、次のような日本語訳に対応するもので、道具・手段の主題化というよりも、ある道具の特徴について述べている主題文である。

(67) 太字ペンは、大きな字を書くためのものである。

以上の考察をまとめると、道具・手段を表す名詞句は、中国語では文頭に移動できるけれども、それは主題化というよりも、対比をあらわすもので、対応する日本語では、「は」をつけて文頭に移動することはできない。

⑪ 随伴者：ある行為を共同で行う相手、仲間。

随伴者を表す名詞句は、「跟」や「と」がつくことが多い。この場合も、文頭に移動させると、不自然な場合がある。

(68) a. 我跟小明一起旅行。

b. ??跟小明，我一起旅行。

c. 私は太郎と一緒に旅行する。

d. ??太郎とは、私は一緒に旅行する。

しかし、「常常」「しばしば」等の副詞をつけて、相手との関係の特徴を述べる文にすると、陳述部分の状態性が高まり、不自然ではなくなる。

(69) a. 跟小明，我常常一起旅行。

b. 太郎とは、私はしばしば一緒に旅行する。

以上、どのような成分が文頭に移動できるか、ということ考察した。藤堂 (1968) は、この問題について日本語の格助詞と対照させ、「中国語の目的語にも、移動できるものとできないもの、移動して介詞が不要なものが必要なものがあり、目的語とひとくちにいても、実に多様である」と述べている。本稿は、藤堂氏のこの考え方をさらに厳密化し、形態格からではなく、意味役割からこの問題を考えた。その結果わかったことは、主題になりやす

いか否か、また、文頭に位置した場合、介詞・格助詞が不要か必要かを決めているのは、意味役割であるということである。意味役割による振る舞いの相違は、次のように整理できる。

- (70) a. 主題になりやすいものは、動作主、感情・感覚の経験者、被動者・被動物、特徴を述べる部分が後続する場合の場所を表す名詞句で、文頭に位置しても、介詞・格助詞を必要としない。
- b. 主題になりにくいものは、受取人、受益者、ある出来事が起こっている場所、主体や客体が存在する場所、起点、着点、道具・手段、随伴者等である。特に、中国語では、移動後の落ち着き先を示すような受取人、場所、着点は、文頭に位置することができない。

3. 終わりに

本稿で考察したことをまとめると、以下のようになる。まず、日中両語は、いわゆる多主語構文を許す言語であるが、主語と主題という概念の区別が、多主語構文を分析する際重要となる。主語と主題が、再帰名詞「自己」「自分」の先行詞決定、属格との交替という二つの言語現象において、違った振る舞いをすることからも、両者の区別が支持される。名詞句の分析のレベルとして、意味役割、格、文法機能、談話機能、情報構造といった、互いに自律的なレベルを想定したほうが、言語現象をうまく説明できるのである。

次に、こうしたレベル間の区別を前提に、中国語の主述述語文のうち、典型度が高い三つの型について、日本語と対照させながら考察した。そこからわかったことは、まず、「大象鼻子长」型の中国語の主述述語文は、「象は鼻が長い」という主題構造にも、「象が鼻が長い」という焦点を含む構造にも相当することである。第二に、場所詞や時間詞が文頭に並ぶ場合を考察し、こうした場面設定語も、主題の場合と焦点の場合の両方がありうるということを見た。主語とみなされるのは、述語の外項のみである。第三に、移動型の主述述語文の考察をし、文法機能レベルの概念である「目的語」は、文頭に移動しても、談話機能として、主題・焦点・対比といった機能が加わるだけで、「目的語」であることには何の変更もないことを主張した。目的語であること

を保持するからこそ、文の解釈が正しく行われるのである。また、文頭へどのような成分が移動できるのか、また文頭に前置された場合、介詞・格助詞は必要か否かということは、意味役割に深く関わっていることを検証した。

主谓谓语句及び「は」と「が」の問題は、両言語の文法において、大きな問題として研究がすすめられていながら、未解決の部分も多々ある。中国語と日本語は、形態格標識という基準からみれば、孤立語と膠着語という異なる類型に属するが、いわゆる「多主語構文」を許すか否かという基準からみれば、同じ類型に入る。主題標識・焦点標識・格標識が豊富な日本語から、中国語の主谓谓语句をみることは、大きな知見を得られるのではないかと思う。

【参考文献】

- Chafe, M. L. 1976. "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View." in C. N. Li (ed.) *Subject and Topic*. 22-55. New York: Academic Press.
- Chao, Yuenren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Fukui, N. 1986. *A Theory of Category Projection and its Applications*. Ph. D. dissertation, MIT.
- 福井直樹 1989. 「日英比較統語論」井上和子編『日本語文法小事典』89-108. 東京：大修館書店。
- 長谷川信子 1999. 『生成日本語学入門』東京：大修館書店。
- 井上和子 1989. 「「は」と「が」：統語構造と談話構造」井上和子編『日本語文法小事典』157-163. 東京：大修館書店。
- 久野 暁 1973. 『日本文法研究』東京：大修館書店。
- Li, C. N. and S. A. Thompson. 1976. "Subject and Topic: A New Typology of Language" in C. N. Li (ed.) *Subject and Topic*. 457-489. New York: Academic Press.
- 李一平 1995. 『日中比較語法』台南：大行出版社。
- 呂叔湘 1986. 「主谓谓语句举例」『中国语文』第5期, 334-340.
- 望月圭子 1986a. 「漢語的主題結構」『中国語学』233号. 日本中国語学会。
- 望月圭子 1986b. 「主題のハイエラーキー」『中国語』11月号. 東京：大修館書店。
- 望月圭子 1987. 「汉语主题的分类类型」『汉语学习』第2期, 8-11. 吉林：延边大学。
- 望月圭子 1999. 「「は」と「が」：中国語を母語とする学習者への教授法」『東京外国語大学百周年記念論文集』
- 野田尚史 1996. 『「は」と「が」』(新日本語選書1) 東京：くろしお出版。
- 湯廷池 1988. 「国語语法与功用解释」『漢語詞法句法論集』105-147. 台湾学生書局。

- Tang, T. C. 1994. "A 'Minimalist' Approach to a Contrastive Analysis of English, Chinese and Japanese" in *Proceedings of the Fourth International Symposium on Chinese Language and Linguistics*. Taipei: Academic Sinica.
- 藤堂明保 1968. 「客語の文頭への提前と「格」の考えの導入」『中国語学』184号. 中国語学研究会。
- 角田太作 1991. 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版。
- 王 了一 1956. 「主語的定义及其在汉语中的应用」『语言学习』1月号, 21-25。
- 殷志平 1996 「主谓谓语句综述」胡裕树・范晓主编『动词研究综述』山西高校联合出版社。
- 朱德熙 1982. 『语法讲义』北京:商务印书馆。

■作者紹介 (拼音順)

- 程遠巍 (大阪府立大学 後期博士課程在籍)
丁 鋒 (熊本学園大学 助教授)
都築雅子 (中京大学 助教授)
渡边丽玲 (大阪外語大学 非常勤講師)
方经民 (松山大学 教授)
馮富栄 (愛知淑徳大学 助教授)
宮本節子 (姫路工業大学 助教授)
胡士云 (四天王寺国際仏教大学 助教授)
金立鑫 (上海外国語大学 教授)
梁曉虹 (愛知県立大学 助教授)
刘勋宁 (筑波大学 助教授)
孟子敏 (北京言語文化大学 副教授／松山大学 助教授)
亓海峰 (青島大学 講師)
齐沪扬 (上海師範大学 教授)
任 鷹 (中国広播電視大学 助教授)
杉村博文 (大阪外国語大学 教授)
石 鋒 (南開大学 教授／名古屋学院大学 教授)
史彤嵐 (関西大学 後期博士課程在籍)
史有为 (明海大学 教授)
蘇徳昌 (奈良大学 教授／復旦大学 教授)
宋玉柱 (南開大学 教授)
王学群 (大東文化大学 非常勤講師)
王占华 (北九州大学 助教授)
望月八十吉 (大阪市立大学 名誉教授)
望月圭子 (東京外国語大学 助教授)
徐国玉 (神戸大学 非常勤講師)
余 维 (関西外国語大学 助教授)
原由起子 (姫路獨協大学 助教授)
张济卿
张 黎 (大阪産業大学 助教授)
張 勤 (中京大学 助教授)
周 刚 (安徽大学 助教授／東京外国語大学 非常勤講師)

■英文目次

Types of tone sandhi and 3-3 tone sandhi	Shi Feng & Qi Haifeng	7
The phonetic distribution of ancient abrupt tone words in common language	Ding Feng	21
The goal of the contemporary linguistics and grammar	Jin Lixin	39
“做” and “作”	Liu Xunning	57
A survey of the mixing of Japanese into the Chinese texts in Japan	Hu Shiyun	65
Forming Chinese compound words - selecting synonymous morphemes	Meng Zimin	85
Honorific expressions in Japan and China	Su Dechang	95
Programatic contrastive analysis of space deixis - A new approach to deictic usage -	Yu Wei	111
Contributions of Chinese buddhist monks to philological studies of Chinese	Liang Xiaohong	123
The syntactic and semantic analysis of “neng” (能) and “hui” (会) - focused on the expression of ability and possibility -	Watanabe Ririn	147
Degree of adverbs “shifen”(十分) and “feichang”(非常)	Hara Yukiko	157
A review of the history in the emersion and eovlution of conjunction	Zhou Gang	171
“V zhe” in Chinese	Wang Xuequn	207
The prevalent mistakes of foreign students in studying the Chinese auxiliary verb “了” and their analysis	Feng Furong	227
Cognitive characteristics and semantic comprehension of the spatial location reference in Chinese	Fang Jingmin	237

On the expression of imperative and politeness : A study of the requests benefiting the addressees in modern Chinese Zhang Qin & Tuzuki Masako & Miyamoto Setuko	257
A number of members theory keys of semantics category and feature	Zhang Li 275
An analysis of the casually affected case of instrument object and its formation condition	Ren Ying 293
Comparative studies on multiple subject sentences in Chinese and Japanese	Mochizuki Yasokichi & Mochizuki Keiko 317
On the semantic function of the classifier “ge” prefixed to the object of the “ba” sentence	Sugimura Hirofumi 347
The Chinese passive voice as found in translations from Japanese	Cheng Yuanwei 363
Some problems concerning the study on directional verbs	Qi Huyang 373
The re-consideration about the classification of object in Chinese	Wang Zhanhua 389
On “Jianyushi (pivotal constructions)” and relevant syntactic construction system	Zhang Ji Qing 415
On the usage of “zai” as a particle expressing location special	Xu Guoyu 443
On the different three “de” (的)	Shi Youwei 453
Syntactic phenomena relating to the sentence stress	Shi Tonglan 481
On the 《Xiandai Hanyu yufa jianghua》	Song Yuzhu 493

現代中国語研究論集

1999年11月10日 初版発行

現代中国語研究会

発行者 川端幸夫

発行所 中国書店

〒812-0035 福岡市博多区中呉服町5番23号

TEL:092-271-3767

FAX:092-272-2946

印刷所 川島弘文社

製本所 篠原製本

装 幀 スタジオDDS
